

女子大学生の充実した学生生活とキャリア形成をめざして —令和3年度 学生生活アンケート調査結果からの考察—

岡部 憲宗^{*1}・田中 由美子^{*2}

^{*1}九州女子大学・九州女子短期大学キャリア支援課 北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1 (〒807-8586)

^{*2}九州女子大学家政学部 北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1 (〒807-8586)

(2022年5月24日受付、2022年7月5日受理)

要 旨

2020年1月に公表された「教学マネジメント指針」(中教審大学分科会)において、学修者本位の教育の実現を図るためには、エビデンスとなるデータを収集・分析し、客観的なデータに基づいた教育改善の推進が必要かつ重要であることが記されている。これを受け、九州女子大学・九州女子短期大学(以下、「本学」と表記)キャリア支援課は、2021年12月に在籍する大学・短大生1,584人を対象として「学生生活アンケート」を実施し1,287人からの回答を得た。この結果を集約・分析したところ、学生の意識(要望・悩み)および学生生活の実態等が把握・確認でき、今後支援・改善すべき内容の示唆を得た。次年度に向け、さらにより良い学生生活を支援する教育改善の方策を検討していく。

キーワード：学生生活アンケート、教育改善、キャリア支援

1. 研究の背景と目的

2020(令和2)年1月22日、中央教育審議会大学分科会において「教学マネジメント指針」¹⁾が公表された。当該指針では、教学マネジメントの確立に当たって、学修者本位の教育の実現を図るため、教育改善を重視すること、また、そのためにはエビデンスとなるデータを収集・分析した上で、客観的なデータに基づいた教育改善の推進が、必要かつ重要であることが記されている。

この指針における「教育改善」は、主に学修面について言及されている。しかし、大学においては学修面以外も含めた学生生活全般がより良いものになるよう、環境の整備・改善が常に求められる。

本研究は、学修者である本学学生にとって、本学で過ごす2年間もしくは4年間に有意義で快適な期間・場所となるよう、学生生活アンケートの結果をもとに本学学生の意識・生活実態等を把握し、教育のあり方や学修環境改善のための示唆を得ることを目的とする。

2. 研究の方法

2.1 調査の概要

令和3年度に本学で実施した学生生活アンケート調査の概要は、次のとおりである。調査実施期間は、2021年12月10日(金)～12月20日(月)。調査項目は、自由記述も含め117項目であった。調査方法は、Googleフォームを用い、Web上にて無記名のアンケート調査を実施した。調査対象者は、本学の在学生1,584人、このうち1,287人からの回答を得た。全体の有効回答率は78.5%であった。

調査対象者の内訳は、以下のとおりである。

本学【九州女子大学】

有効回答率：81.6%

	1年生	2年生	3年生	4年生	合計
在学生数	328人	331人	331人	291人	1,281人
回答者数	293人	279人	269人	204人	1,045人

本学【九州女子短期大学（専攻科を含む）】 有効回答率：79.9%

	1年生	2年生	合計
在学生数	159人	144人	303人
回答者数	133人	109人	242人

2.2 調査の分析方法

Excel2019を用いて単純集計を行った。

3. 研究の結果と考察

3.1 本学を選んだ理由

「Q9. 今の大学を選んだ理由は何ですか（3つ以内）」と尋ねた結果を表1に示す。

最も多かったのは「学びたい学部・学科がある（71.4%）」、次いで「資格・免許が取得できる（62.9%）」であった。この2項目は3番目の「通学に便利（17.6%）」と大差があることから、本学の教育に対する期待・ニーズの高さがうかがえる。今後も、ニーズを確実に捉えた学科・カリキュラムの検討が重要である。

3.2 学修成果の向上に必要な授業内容

「Q12. 授業における学修成果を向上させるためには、何が必要だと思いますか（複数回答可）」と尋ねた

表1 本学を選んだ理由（N=1,287）

Q9.本学選択理由(3つ以内)	%
1. 学びたい学部・学科がある	71.4%
2. 資格・免許が取得できる	62.9%
3. 通学に便利	17.6%
4. キャンパスの環境・施設・設備がよい	12.5%
5. オープンキャンパスで魅力を感じた	9.2%
6. 校風・雰囲気がよい	7.9%
7. 自分の実力に合っていた	6.7%
8. 周りの人に勧められた	5.3%
9. 就職に有利だと思った	5.0%
10. 大学の知名度が高い	0.9%

表2 学修成果の向上に必要な授業内容（N=1,287）

Q12.授業での学修成果向上に必要な内容(複数可)	%
1. 自分の考えをまとめたり、振り返ったりする機会を増やす	43.7%
2. 他者と討論をし、資料をまとめる機会を増やす	24.0%
3. 遠隔授業でリアルタイム授業を増やす	17.9%
4. レポート（実験・実習・授業のまとめ）を増やす	16.7%
5. 小テストを増やす	16.1%
6. レポート（調べ学習等・主体的に学ぶ課題）を増やす	11.7%
7. 宿題（予習、復習）を増やす	10.3%
8. 2.5.6の成果を発表する機会を増やす	2.8%

結果を表2に示す。

最も多かったのは「1. 自分の考えをまとめたり、振り返ったりする機会（43.7%）」、次いで「2. 他者と討論し、資料をまとめる機会（24.0%）」、「3. 遠隔授業でリアルタイム授業（17.9%）」であった。中等教育課程の新学習指導要領において「主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング：以下、「AL」と表記）が重視され、近年、多くの取組みが見られるが、学生たちもこれらの学修方法である1. および2. の授業効果を実感していることがわかる。ただ、ALは、知識修得の量的確保が困難であること、また、目標が明確でなかったり、学生個々人の考えをまとめないまま意見交換を行ったりすると、雑談・脱線を引き起こしかねないこと等の指摘もある。ファシリテーターとなる教員が目標を明示し、各自の考えを文章化した後、意見交換させるよう留意する必要がある。

また、インターネット検索・文献調査等を行う際は、引用元として相応しい検索サイトや雑誌・書籍の紹介、多種多様な情報からの適切な取捨選択方法、引用時のマナーの遵守等を伝えなければならない。これらを踏まえれば、1年次においても有意義な協働学修、調査・発表を行うことが可能である。

上記は、近年求められている「汎用的能力」にも通じるため、学修方法の表面的な取入れに留まらず、「振り返り」には、①着眼すべき基準を明示した上でそれに沿って行う、②メタ認知等を援用し自身を客観視したり自身と向き合って考えを深めたりする技能を体得させる等、本質的な能力向上をめざす必要がある。

「4. レポート（実験・実習・授業のまとめ）（16.7%）」、「5. 小テスト（16.1%）」、「6. レポート（調べ学習等、主体的に学ぶ課題）（11.7%）」等の取組みについても一定数の割合を占めていた。これらは、知識定着および授業外学修を促すためにも大変効果的である。近年、大学生の授業外学修時間の短さが指摘され、文部科学省からは、授業と同等時間の学修を促すためシラバスに予習・復習内容を記載するよう求められている。これも踏まえ、授業や学科・専攻の特性を考慮し、4. 5. 6. の導入を図ることが望ましい。

3.3 現在以上に充実させることを希望するもの

「Q92. 大学での教育（授業等）で、下記のうち、現在以上に充実させることを希望するものはどれですか（3つ以内）」と尋ねた結果を表3に示す。

現在以上に「充実させる」ことへの希望が最も多かったのは「1. 専門教育（42.9%）」、次いで「2. 礼儀・マナー教育（25.3%）」、「3. 教養教育（19.8%）」であった。

「1. 専門教育」への要望の多さは、前出3.1「本学を選んだ理由」に通じるものである。また、「2. 礼儀・マナー教育（25.3%）」の必要性は、学生の指導の中でも痛感している。初年次教育等で、全学生に対して学ぶ機会を確保することが望まれる。これらに加え、学生からの希望はさほど多くない「8. 国際交流・海外外研修」、「10. 情報処理教育」、「15. 起業家養成教育」は、他の女子大学では「遠隔授業による英会話レッスン」、「データサイエンス教育・ICT教育」、「女性のキャリア形成・女性リーダー育成・アントレプレナー講座」等として導入され²⁾、教育の潮流といえるものである。学生たちが興味関心を持ち、学ぶ意義を感じられるよう工夫し導入することが必要である。

3.4 大学での講習会等を望むもの

「Q93. 大学での指導・啓発（講習会等）があればよいと思うものは何ですか（3つ以内）」と尋ねた結果を表4に示す。

最も多かったのは「1. 精神的自己管理（メンタルヘルス・ストレス対処法等）（36.1%）」であり、次いで「2. 労働関連（アルバイト等）（26.5%）」、「2. 年金関連（社会保険、損害保険、個人年金等）（26.5%）」、「4. 消費生活関連（契約、悪質商法、相談窓口等）（23.8%）」であった。「2. 年金関連」、「4. 消費生活関連」は、家政学部では1年次の必修科目「家政学概論」（オムニバス）の授業において、また、「2. 労働関連」は、人間生活学科では「消費生活論」の授業において、学ぶ機会がある。しかし、「2. 労働関連」、「2. 年金関連」、「4. 消費生活関連」は社会生活において必要な知識であることから、初年次教育等による全学的な導入が望ましい。

表3 現在以上に充実させることを希望する教育（授業等）（N=1,287）

Q92.現在以上の充実を希望するもの（3つ以内）	%
1. 専門教育	42.9%
2. 礼儀・マナー教育	25.3%
3. 教養教育	19.8%
4. 資格取得教育（学内教員による）	16.6%
4. キャンパスの施設・設備	16.6%
6. 就職・採用試験に向けた対策支援（オンライン就活も含む）	12.2%
7. 教員の資質向上	11.2%
8. 国際交流・海外研修	9.2%
9. 資格取得教育（学外講座・講師による）	9.0%
10. 情報処理教育	7.8%
11. 語学教育	7.3%
12. 少人数教育	5.2%
13. 生涯教育・自己啓発教育	5.1%
14. オフィスアワー、教員と交流できる時間	4.6%
15. 起業家養成教育	2.6%

表4 大学での指導・啓発（講習会等）を望むもの（N=1,287）

Q93.大学での講習会等を望むもの（3つ以内）	%
1. 精神的自己管理（メンタルヘルス・ストレス対処等）	36.1%
2. 労働関連（アルバイト等）	26.5%
2. 年金関連（社会保険、損害保険、個人年金等）	26.5%
4. 消費生活関連（契約、悪質商法、相談窓口等）	23.8%
5. 身体的自己管理（食事、健康チェック、病気予防等）	18.4%
6. 情報モラル（SNSの利用等）	17.5%
7. 犯罪被害予防（ハラスメント、DV等）	13.4%
8. 海外渡航上の安全管理	4.6%
9. 通学上の安全管理	4.0%

また、知識修得以上に希望の多かった「1. 精神的自己管理（メンタルヘルス・ストレス対処法等）（36.1%）」を学び身に付けることは、後述する3.7の「抱えている悩み・問題」の軽減・解消にもつながると思われる。そのため、学生たちが自身で対処できる実践的なスキルを身に付ける学修機会の提供が必要である。

さらに、「5. 身体的自己管理」については、後述する3.9の「朝食の摂取状況」の結果も踏まえて、具体的解決策を考えていく必要がある。「6. 情報モラル」、「7. 犯罪被害予防」に関しては、外部講師の招聘等により、専門的な知識や具体事例を用いた講習会を開催することが考えられる。

3.5 クラブ・サークル活動とアルバイトについて

「Q22. あなたはクラブ活動やサークル活動に参加していますか」と尋ねた結果を表5に示す。

クラブ・サークル（学外の団体を含む）には、約3割（29.0%）の学生が参加しており、残り約7割（71.0%）の学生は不参加であった。その理由を尋ねた「Q30. クラブ活動、サークル活動に参加しない理由は何ですか」の回答結果を表6に示す。これによると、多い順に「1. アルバイトの時間が欲しい（37.9%）」、「2. 参加するきっかけを逸してしまった（19.3%）」、「3. 自分の関心に合うものがない（17.2%）」、「4. 通学に時間を取られる（17.1%）」、「5. 勉学に打ち込みたい（15.5%）」、「6. 他にやりたいことがある（10.9%）」、「7. 参加の手続きがわからなかった（9.0%）」であった。2. および7. 以外の上位回答を見ると、他への興味や生活事情が主な理由であることがわかる。

表5 クラブ・サークル活動の参加状況
(N=1,287)

Q22.クラブ活動・サークル活動への参加状況	%
1. 学内のクラブ・サークル等に参加	24.0%
2. 地域等のクラブ・サークル等に参加	2.5%
3. 複数大学の学生が参加するサークル活動に参加	1.8%
4. 学内および学外のクラブ・サークル等に参加	0.7%
5. 参加していない	71.0%

表6 クラブ・サークル活動に参加しない理由
(N=913)

Q30. クラブ活動・サークル活動に参加しない理由 (複数回答可)	%
1. アルバイトのための時間が欲しいから	37.9%
2. 参加するきっかけを逸してしまったから	19.3%
3. 自分の関心に合うものがないから	17.2%
4. 通学に時間を取られているから	17.1%
5. 勉学に打ち込みたいから	15.5%
6. 他にやりたいことがあるから	10.9%
7. 参加の手続きがわからなかったから	9.0%
8. 集団や他人に拘束されるのが嫌だから	3.5%
9. 上下の人間関係が嫌だから	2.7%
10. 費用がかかり過ぎるから	2.2%

一方、「2. きっかけを逸してしまった」が約20%（176人）、「7. 手続きがわからなかった」も9.0%（82人）と少なくないことから、入学当初は加入意思があったにもかかわらず、不参加の学生が多いという実態が明らかとなった。この課題を解消するには、大学側が新入生対象のクラブ・サークル紹介の機会を設けたり、学友会の勧誘を活性化させたりする策を講じていくことが必要である。クラブ等への参加を促す目的は、次の調査結果にも関連があると思われるためである。

「Q91. 学生生活（学習面以外）の充実度はどれくらいですか」と4件法で尋ねた結果を表7に示す。これによると、約85%が肯定的回答をしており、その理由を自由記述で求めたところ「友人関係がいいから」「友達といると楽しいから」との回答が多数を占めていた。彼女たちにとって、友人の存在が学生生活の充実度に大きな影響を与えていることがわかる。現在は、主に学科・専攻内で築いていると思われる友人関係を、クラブ・サークル活動でコミュニティを広げることによって、多様な交友関係の中でさらに視野を広げ、良い刺激を受けられるのではないかと考える。これらも社会の中で必要な力の素地になるため推進していく。

表7 学生生活の充実度（学習面以外）（N=1,287）

Q91.学生生活の充実度（学習面以外）	%
1. 非常に充実している	26.3%
2. ある程度充実している	58.7%
3. あまり充実していない	12.5%
4. 全く充実していない	2.5%

続いて、クラブ・サークルに加入しない理由の約4割を占めるアルバイトの状況についてその詳細を見ると、大学・短大を合わせて約8割（79.0%）の学生がアルバイトをしており、そのうち約8割（81.7%）が販売・接客（対面型）業に従事していること（表8）、労働時間としては、週に3日（表9）、一週当たり10～20時間ほど働いている者が最も多いこと（表10）がわかった。

アルバイトをする理由（表11）としては、「1. 欲しいものの購入、旅行、レジャー資金を得るため」が46.0%と半数近くを占めており、「2. 生活費（家賃や食費）を得るため（23.7%）」、「3. 貯金をするため（13.0%）」、「4. 学費の支払い（8.2%）」がこれに続いている。Q30（表6）においては、クラブ・サークル活動に参加しない理由として「アルバイト時間の確保」を挙げる学生が多いが、その理由は生活費や学費の支払いといった差し迫ったことよりも、物品購入や旅行・レジャーの資金獲得など娯楽目的の方が多かった。このことから、本学学生の傾向としては、学修時間以外の時間は、アルバイトやクラブ・サークル活動を通じてより楽しく充実した学生生活を送りたいという意識を持っている者が多いことが窺える。

表8 アルバイトの職種

Q51. アルバイトの職種	%
1. 接客（飲食店・美容・医療等、「対面」）	58.1%
2. 販売（スーパー・コンビニ等）	23.6%
3. 製造（調理・縫製等）	4.7%
4. 学習支援・保育	4.2%
5. 家庭教師、塾教師	4.0%
6. 接客（コールセンター等、「非対面」）	2.4%
7. 事務、データ入力・集計	1.7%
8. 雑役、清掃	1.1%
9. 配達、運搬、車両ドライバー	0.2%

表9 アルバイトの日数（週単位）

Q53. アルバイト日数（週単位）	%
1. 週3日	36.7%
2. 週4日	23.0%
3. 週2日	21.0%
4. 週5日	10.9%
5. 週1日	6.7%
6. 週6日	1.3%
7. 毎日	0.4%

表10 アルバイトの時間（週単位）

Q54. アルバイトの時間（週単位）	%
1. 10～20時間未満	34.4%
2. 5～10時間未満	32.3%
3. 5時間未満	19.0%
4. 20～30時間未満	12.3%
5. 30時間以上	2.0%

表11 アルバイトをする目的・理由

Q52. アルバイトをする目的・理由	%
1. 欲しい物の購入、旅行・レジャー費用を得るため	46.0%
2. 生活費（家賃や食費など）を得るため	23.7%
3. 貯金をするため	13.0%
4. 学費を払うため	8.2%
5. 社会勉強のため	8.2%
6. クラブ・サークル活動費を得るため	0.9%

3.6 ボランティア活動について

「Q37 大学入学後にボランティア活動をしたことがありますか」と尋ねた結果を表12に示す。

ボランティア活動については、大学・短大を合わせて4割弱（36.3%）の学生が「1. 現在、参加している」、「2. 過去に参加したことがある」と回答し、残りの6割強（63.7%）は参加したことがないと回答した。

ボランティア活動に参加していない学生に対しその理由について尋ねたところ（表13）、「1. 時間がな

い (23.0%)」と回答した学生が最も多かった。これ以降は、「2. 参加のチャンス・きっかけがない (22.6%)」、「3. 参加方法が分からない (16.3%)」、「4. 一人で参加する気になれない (10.6%)」、「5. 参加したいが活動がない (7.1%)」であった。以上のような2, 3, 4, 5. との回答は、上記Q37 (表12) の設問において「3. 興味はあるが参加したことはない」と回答した学生と符合すると思われる。これも前出のクラブ活動同様、ボランティア活動への参加を妨げる要因の解消によって参加率の上昇が期待できる。具体的な対策としては、ボランティア募集広報の強化 (UNIPAの活用や説明会の開催)、募集要項 (マニュアル) の作成、ボランティアサークルの立上げ、活動内容 (種類) の拡大等が考えられ、これらを大学側が主体的に講じる必要がある。

表12 大学入学後のボランティア経験の有無 (N=1,287)

Q37. 大学入学後のボランティア経験の有無	%
1. 興味はあるが参加したことはない	50.1%
2. 過去に参加したことがある	25.4%
3. 興味もないし参加したこともない	13.6%
4. 現在、参加している	10.9%

表13 ボランティア活動に参加しない理由

Q39. ボランティアに参加しない理由 (複数回答可)	%
1. 時間がない	23.0%
2. 参加のチャンス・きっかけがない	22.6%
3. 参加方法が分からない	16.3%
4. 一人で参加する気になれない	10.6%
5. 参加したい活動がない	7.1%
6. 経済的余裕がない	3.9%
7. 体力に自信がない	2.9%
8. 誰かと何かを一緒にやるのが苦手	1.5%
9. 特に理由なし	12.1%

3.7 現在抱えている悩み・問題

「Q59. 現在抱えている悩みや問題は何ですか (3つ以内)」と尋ねた結果を、「大学・短大別」および「上級生 (卒業・修了学年: 大学4年・短大2年・専攻科2年)」、「下級生 (大学1-3年・短大1年・専攻科1年) 別」に集約した結果を表14に示す。

大学の卒業学年 (4年) と1-3年を比較すると、4年の方が多いものは「3. 金銭問題」、「9. 家族の問題」のみ (0.4%・0.1%差) であり、他の10項目は低かった。それに対し、短大・専攻科は、卒業・修了学年 (短大2年・専攻科2年) の方が、「1. 就職・将来の進路」(7.1%差)、「3. 金銭問題」(8.0%差)、「友人関係」(3.5%差) と多く、さらに1, 2. は、大学4年との比較で、10ポイント以上差がある (二重下線)。

これについては、望月 (2022) の「大学生の不安や悩み」『令和2年度 学生生活調査結果 (日本学生支援機構; 有効回答数: 37,591人)』³⁾ のデータを参照し考察する。同調査報告には、次のような結果が示されている。

- ① 現状 (「授業についていけない」「経済的に勉学の継続が困難」「友人関係に悩みがある」) よりも、卒業後 (「希望の就職先・進学先に行けるか不安」「卒業後、やりたいことがみつからない」) に不安・悩みを抱える学生が多い。
- ② ①のうち、卒業後の不安「希望の就職先・進学先に行けるか不安」については、4年生 (卒業時学年) において顕著に減少する。
- ③ 1年生は、「授業についていけない」「友人関係に悩みがある」が、他学年より明らかに高い (つまり、上級学年になると減少する)。 ————— とある。

上記②の「希望の就職先・進学先に行けるか不安」(本調査では「就職・将来の進路が悩み」) については、本学の大学においては、望月の調査結果と同様の傾向 (-12.0%) が見られたが、短大・専攻科では逆 (+7.1%) の状況が見られた。さらに、大学4年と短大2年・専攻科2年を比較すると17.3ポイントもの差が見られた。本調査・望月調査ともに同一人物の経年変化を追跡したものではないが、一定の傾向が把握できる。

表14 現在抱えている悩み・問題 (N=1,287)

Q59.現在抱えている悩み・問題 (3つ以内)	大学1-3年 (N=841)	大学4年 (N=204)	差	短大1年・ 専攻科1年 (N=133)	短大2年・ 専攻科2年 (N=109)	差
1. 就職・将来の進路	42.4%	30.4%	-12.0%	40.6%	<u>47.7%</u>	7.1%
2. 勉学上の問題	41.1%	23.5%	-17.6%	42.9%	22.9%	-20.0%
3. 金銭問題	20.2%	20.6%	0.4%	24.1%	<u>32.1%</u>	8.0%
4. 自分の性格や能力について	16.6%	11.8%	-4.8%	15.0%	12.8%	-2.2%
5. 精神・心理的問題	15.8%	9.3%	-6.5%	19.5%	<u>14.7%</u>	-4.8%
6. 友人関係	8.8%	2.5%	-6.3%	3.8%	7.3%	3.5%
7. 身体的健康上の問題	6.1%	1.0%	-5.1%	4.5%	4.6%	0.1%
8. 恋愛・異性問題	5.0%	2.0%	-3.0%	4.5%	3.7%	-0.8%
9. 家庭の問題	2.4%	2.5%	0.1%	2.3%	2.8%	0.5%
10. クラブ・サークル関係	2.3%	0.5%	-1.8%	1.5%	0.0%	-1.5%
11. ストーカーやセクハラの問題	0.1%	0.0%	-0.1%	0.0%	0.0%	0.0%
12. SNS等でのトラブル	0.1%	0.0%	-0.1%	0.0%	0.0%	0.0%
13. 特に悩んでいない	21.3%	34.3%	13.0%	24.8%	<u>25.7%</u>	0.9%

※ 「差」 : (上級学年) - (下級学年)

※ 斜体・太字 : 「差」がプラス

※ 二重下線 : (短大・専攻科2年) - (大学4年)の差が10ポイント以上

※ 一重下線 : (短大・専攻科2年) - (大学4年)の差が5ポイント以上

この結果については、キャリア支援課が集約した「卒業生の進路状況」と照合・分析し、解決策を考えることができる。一例を述べると、資格・免許は取得できるものの卒業年次の採用試験合格が極めて困難であり、新卒時には正規採用ではなく臨時・契約として採用される学生が多い職種がある。その勤務先が決定するのは3月半ば以降であるため、本アンケート実施の12月半ば時点でも将来への不安を持っているものと推察できる。大学側は、出口保証に直結する「試験合格」という成果に向けた実践的な支援を行うとともに、学生たちには現実を直視させ、就業に向けた具体的な助言を行うことが、必要かつ重要である。

上記③のうち、「授業についていけない」(勉学上の問題)は、大学・短大ともに同傾向 (-17.6%・-20.0%)である。しかし、「友人関係に悩みがある」は、大学では同様 (-6.3%)であるが、短大・専攻科は逆 (+3.5%)の状況が見られる。また、短大生の方が、金銭的な悩みを抱えている学生が多いこともわかる。

3.8 休学・退学を考えた経験の有無およびその理由

「Q60.「休学した」あるいは「休学を考えた」ことがありますか」「Q61.「休学した」あるいは「休学を考えた」一番の理由は何ですか」および「Q62.「退学を考えた」ことがありますか」「Q63.「退学を考えた」一番の理由は何ですか」との設問の回答結果を、大学・短大別に集約した結果を表15に示す。

これを見ると、大学・短大ともに、休学・退学を考えた経験のある学生が一定数存在することがわかる。両者に共通している要因として「2. 学習意欲の低下」があり、まずはそれに陥らない支援が必要である。

また、短大において特徴的なのは、「1. 精神・心理的問題」、「9. 進路変更 (就職)」の2項目が、大学に比べ10ポイント以上多いことであり、3. 4で述べた「メンタルヘルスの支援」の必要性が再度確認された。また「9. 進路変更 (就職)」との考えに至る背景を今後の調査で探り支援につなげることも重要である。

退学者・休学者数の抑制は喫緊の課題であるが、結果としての数値のみに注目するのではなく、その意思を持たない、もしくは持った場合に解消されるような根本的・本質的な方策・支援を考える必要がある。

表15 休学・退学を考えた経験の有無およびその理由 (N=1,287)

Q60.「休学した」あるいは「休学を考えた」ことがあるか	大学1-4年 (N=1045)	短大1-2年 専攻科1-2年 (N=242)	Q62.「退学を考えた」ことがあるか	大学1-4年 (N=1045)	短大1-2年 専攻科1-2年 (N=242)
	2. ない	91.1%		86.0%	2. ない
1. ある	8.9% (93名)	<u>14.0%</u> (34名)	1. ある	12.0% (121名)	14.0% (34名)
理由 ↓			理由 ↓		
1. 精神・心理的問題	32.3%	<u>41.9%</u>	1. 精神・心理的問題	16.7%	<u>34.6%</u>
2. 学習意欲の低下	<u>22.6%</u>	16.1%	2. 学習意欲の低下	<u>31.7%</u>	26.9%
3. 進路変更 (他大学等への転学)	15.1%	12.9%	3. 進路変更 (他大学等への転学)	<u>25.8%</u>	15.4%
4. 海外留学	<u>15.1%</u>	6.5%	4. 海外留学	0.8%	0.0%
5. 経済的問題	6.5%	6.5%	5. 経済的問題	<u>6.7%</u>	0.0%
6. 友人関係	6.5%	6.5%	6. 友人関係	<u>8.3%</u>	0.0%
7. 身体的健康上の問題	5.4%	3.2%	7. 身体的健康上の問題	2.5%	3.8%
8. 家庭の問題	4.3%	0.0%	8. 家庭の問題	1.7%	0.0%
9. 進路変更(就職)	3.2%	6.5%	9. 進路変更(就職)	5.8%	<u>19.2%</u>

※ 二重下線 : (短大・専攻科) - (大学) の差が10ポイント以上
 ※ 一重下線 : (短大・専攻科) - (大学) の差が5ポイント以上

3.9 朝食の摂取状況

「Q64. 朝食を食べていますか」と尋ねた結果を表16に示す。

この結果から、約3人に2人は、ほぼ毎日食べている一方で、4人に1人は「3. ほぼ食べない」「4. 週に1～2日食べる」と回答しており、好ましい状況でないことがわかる。他の調査から、朝食欠食の原因は、寝坊、食欲不振等が多いと示されているが、簡単な調理法を知る機会があれば解消の一助になると考える。そのため、入学時イベント・初年次教育等で、全学的に調理実習の機会を設けることを提案したい。

表16 朝食の摂食状況 (N=1,287)

Q64.朝食の摂取状況	%
1. ほぼ毎日食べる	60.6%
2. 週に3～5日食べる	15.0%
3. ほぼ食べない	14.9%
4. 週に1～2日食べる	9.5%

3.10 将来、希望する生き方

「Q89. あなたは将来、どんな生き方をしたいと考えていますか (3つ以内)」と尋ねた結果を表17に示す。

この質問項目は、『令和2年版 厚生労働白書』から引用したものである(資料出典:「国立社会保障・人口問題研究所「出生動向基本調査」)。まだ一つには決めかねている学生の存在も考慮し、複数回答としたため回答合計は100%を超えるが、大まかな傾向を知ることができる。

女性として様々な生き方があって良いこと、また、家族・仕事等の状況に応じて将来的に変化することもあるため、恣意的な教育はすべきでないが、全国調査での回答が7%である「3. 専業主婦」の回答が本学では20%であった。この回答が、将来を具体的に思い描いていない、もしくは現実を考える機会を持っていない結果の選択であるとすれば、非常に憂慮される状況である。自身の「稼働能力が乏しい」、すなわち「経済力がない」、「自立できない」ということは、万が一の場合、現在社会問題となっている「女性の貧困」、「子どもの貧困」に直結する可能性が高い。高等学校家庭科の新学習指導要領には「生活設計」をこれまで以上に重視するよう記されているが、高校卒業までに自身の生涯を見通し、「生き方」を考え構築していくような実践的な学びが得られているか定かではない。このため、家庭経済も含めた「生活経営」、「キャリア形成」に関する学びを大学・短大において全学生が学べるよう初年次教育等に含めることが望ましい。そして、家

庭環境がどのように変化しても、自身のキャリアを思い描き、前へ進んで行ける力を育成する必要がある。

表17 将来、希望する生き方 (N=1,287)

Q89. 将来、希望する生き方	%
1. 両立 (結婚・出産後も退職せず、仕事を一生続ける)	48.3%
2. 再就職 (結婚・出産後、一旦退職し、子育て後に再就職)	34.0%
3. 専業主婦 (結婚・出産後、退職し、その後仕事を持たない)	20.0%
4. 非婚就業 (結婚せず、仕事を一生続ける)	11.8%
5. DINKS (結婚するが、子どもは持たず、仕事を一生続ける)	4.6%

3. 11 教員・職員との関係における満足度

「Q99. 教員との関係について」、「Q100. 職員との関係について」の2項目においてそれぞれ4件法にて満足度を尋ねた。その回答を、「下級生 (大学1-3年・短大1年・専攻科1年)」、および「上級生 (大学4年・短大2年・専攻科2年)」別に集約した結果を表18に示す。

これらは、他の質問項目「友人との関係」、「家族との関係」に比べると「非常に満足している」が低かったが、下級生 (大学1-3年・短大1年・専攻科1年) と上級生 (大学4年・短大2年・専攻科2年) を比べると、上級生の方が、教員との関係については8.3%、職員との関係については7.5%高いことがわかる。この結果からは、卒業年次になり、教員から卒業研究や採用試験対策等で個別に指導を受けたり、職員から就職について相談・面接練習を受けたりする中で、満足度が上がるのではないかと推察できる。

他方で、職員に対し肯定的でない回答の合計が19.5%見られた。これについては、次回の意識調査において自由記述欄を設け、満足度を高めるための要因を探り、今後の指導・支援に生かしていくこととしたい。

表18 教員・職員との関係における満足度 (N=1,287)

Q99.教員との関係 における満足度	下級生 (N=974)	上級生 (N=313)	差	Q100.職員との関係 における満足度	下級生 (N=974)	上級生 (N=313)	差
非常に満足している	16.6%	24.9%	+8.3%	非常に満足している	13.6%	21.1%	+7.5%
ある程度満足している	68.6%	62.6%	小計	ある程度満足している	68.2%	59.4%	小計
あまり満足していない	13.1%	9.6%	13.0%	あまり満足していない	15.4%	16.0%	19.5%
全く満足してない	1.6%	2.9%		全く満足してない	2.9%	3.5%	

4. 総括

本調査の結果および考察から得られた知見は、次のとおりである。

- 1) 本学を選択した主な理由は、「学びたい学部・学科がある (71.4%)」、「免許・資格の取得ができる (62.9%)」であった。今後も、ニーズを確実に捉えた学科・カリキュラムの検討が重要である。
- 2) 学修成果の向上をねらいとした授業の「振り返り」を行うにあたっては、①着眼すべき基準を明示し、それに沿って行う、②メタ認知等を援用し自身を客観視したり自身と向き合っって考えを深めたりする技能を体得させる等、本質的な能力向上を目指す必要がある。
- 3) 現在以上の充実を希望するもの上位3項目は、「専門教育 (42.9%)」、「礼儀・マナー教育 (25.3%)」、「教養教育 (19.8%)」であった。これらは、初年次教育等により、全学的な教育の導入が望ましい。
その他、教育の潮流といえる「遠隔による英会話」「データサイエンス・ICT教育」「女性のキャリア形成・リーダー育成」等も、学生が関心・意義を感じられるよう、工夫し導入することが必要である。
- 4) 大学での講習会等を望むもの上位5項目は、「メンタルヘルス・ストレス対処 (36.1%)」、「労働関係 (26.5%)」、「年金関係 (26.5%)」、「消費生活関連 (23.8%)」、「身体的自己管理 (18.4%)」であった。
これらも初年次教育等により、全学的な教育の導入が望ましい。
- 5) 学修時間以外の時間については、アルバイトやクラブ・サークル活動を通じてより楽しく充実した学生

生活を送りたいという意識を持っている者が多いことが窺えた。

- 6) ボランティアに関しては、「興味はあるが参加したことはない」と回答した学生が半数 (50.1%) を占めた。参加しない理由として「きっかけがない」、「参加方法が分からない」という学生が16～22%存在するため、大学側が参加を促す策を主体的に講じる必要がある。
- 7) 現在抱えている悩み・問題は、大学・短大ともに、「就職・将来の進路」、「勉強上の問題」、「金銭問題」が多かった。全国調査でも本学の大学においても、卒業年次では低下する「就職・将来の進路」が、短大では高かった。同様に金銭問題・友人関係も、短大・専攻科では上級生の方が高かった。「就職・将来の進路」の悩みを軽減するには、大学側が、希望進路の実現に向けて最大限の支援をしつつも現実を直視させ、就業に向けた心構え・準備をさせるために具体的な助言を行うことが必要かつ重要である。
- 8) 休学・退学を考えたことがある学生は、約9%～14%と一定数存在していた。その理由として共通しているものは「学習意欲の低下」があり、短大では、「精神・心理的問題」「進路変更 (就職)」も多かった。
- 9) 朝食摂取は、約3人に2人は「ほぼ毎日食べる」と回答している一方で、4人に1人は「ほぼ食べない」、「週に1～2日食べる」であった。入学時イベント・初年次教育等での簡単な調理機会も検討したい。
- 10) 将来希望する生き方は、「両立 (48.3%)」、「再就職 (34.0%)」、「専業主婦 (20.0%)」であった。卒業時の就職支援にとどまらず、「生活設計」、「キャリア形成」を実践的に学ぶ機会を設ける必要がある。
- 11) 教員・職員との関係の満足度では、両者ともに肯定的回答が80%を超えているが、特に、上級生 (卒業年次) で高かった。職員との関係の満足度に肯定的でないものが、約20%であった。これについては、さらなる調査を重ねて満足度を高めるための要因を探り、今後の指導・支援に活用することとしたい。

以上の結果から、特に具体的な対策を講じる必要のあるものとして、「初年次教育の内容の見直し」および「クラブ・サークル活動・ボランティア活動への参加促進」が挙げられる。学生たちが、意義を感じる学修および多様な人との交流・活動の機会を提供していきたい。これらは、休学・退学抑止にも寄与すると考えられる。本研究の結果を踏まえ、学生の大学生活がさらに充実したものとなるよう、教育改善を進めていく。

5. 引用文献

- 1) 「教学マネジメント指針」(令和2年1月22日 第152回大学分科会) https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1411360_00001.html 2022.5.1閲覧
- 2) Benesse 『Between』2022.3-4月号 (No.302) pp.22-23
- 3) 望月由起 (2022) 「大学生の不安や悩み」について 独立行政法人 日本学生支援機構 『令和2年度 学生生活調査結果』 pp.39-46

**Aiming for a fulfilling student life and career development for female
university students
-Consideration from the results of the Reiwa 3rd year student life
questionnaire survey-**

Norimune OKABE^{*1}, Yumiko TANAKA^{*2}

^{*1}Career Support Office, Kyushu Women's University, Kyushu Women's Junior College

1-1 Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyushu-shi 807-8586, Japan

^{*2}Faculty of Home Economics, Kyushu Women's University

1-1 Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyushu-shi 807-8586, Japan

Abstract

In the "Educational Management Guidelines" (Central Council for Education Subcommittee) published in January 2020, to realize a learner-oriented education, evidence data is collected and analyzed, and based on objective data. It is stated that the promotion of educational improvement is necessary and important. In response, the Career Support Office of the University conducted a "Student Life Questionnaire" in December 2021 targeting 1,584 university and junior college students, and received responses from 1,287 students. As a result of aggregating and analyzing these results, we were able to grasp and confirm students' consciousness (requests/worries), the actual situation of student life, and so on, and obtained suggestions for future support/improvement. For the next fiscal year, we will consider measures to improve education that provide even better support to student life.

Key Word : Student life questionnaire, Education improvement, Career Support